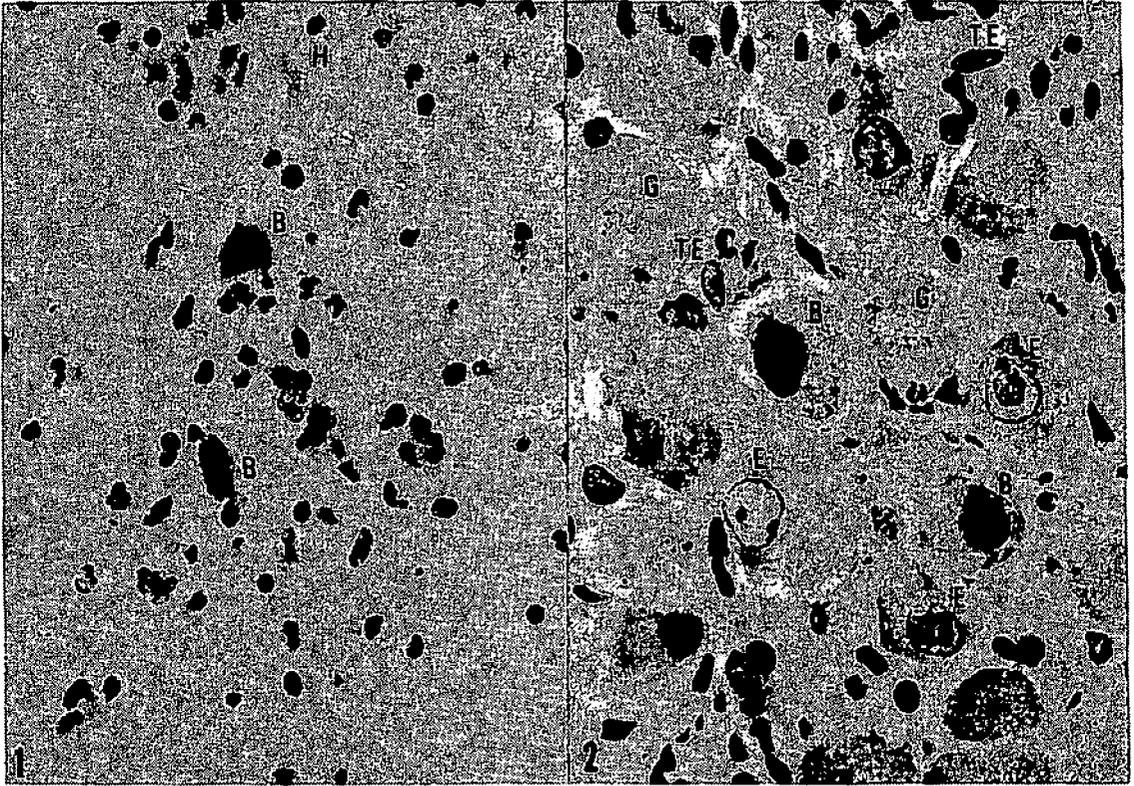


実験假性狂犬病フェレットの 腰髄(第1～第2)および腹腔神経節

岩手大学農学部家畜病理学教室出題
第11回獣医病理学研修会標本 No.160



假性狂犬病 (AUJESZKY氏病) は、本邦においてはまだ発生をみないが、欧米においては多くの家畜、野生動物にその発生が知られ、被害も少なくない。病原体はヘルペス型ウイルスに属し、宿主の種類、感染経路などにより、それぞれ異った症状を呈し致命率も高い。豚は保毒者として、本症の発生、伝播に重要な役割を演じている。

本例は黒毛フェレット、雄、12ヵ月令で、假性狂犬病ウイルス (SHOPE株 10^5 PFU/ml) 0.05mlを右後肢踵皮下に接種したものである。接種翌日より沈うつ、食慾不振、接種部位および同側後肢より腰背部にかけて時折かむも一見正常と見分けがつかない。接種後116時間で不安症状、狂躁状態を示し、特に腰部麻痺が顕著で、発症後6時間で斃死したものである。

肉眼的には肝、脾の軽度の腫大がみられる程度で、接種部位には特に病巣を確認出来なかった。

組織学的所見：腰髄においては、病変は右側背柱から中間側柱および中心管周囲に認められる。病巣は写真1 (×350)に示される如く、神経細胞は濃染萎縮性となり、原形質は均質となり (H)、核はしばしば塩基性封入体

をみられ核膜の肥厚がみられる (B)。余り強い細胞変化を示さないものでは、時に好酸性封入体を核内にいれる。病巣には強いグリアの増殖と核崩壊がみられ、かなり強い好中球の浸潤もみられる。

中心部では中心管上皮の剝離、囲管性ないし巣状のグリア増殖、神経細胞の変性と核内封入体を認める。軟膜においても軽度乍ら細胞浸潤が認められる。

腹腔神経節では写真2 (×560)に示す如く、神経節細胞の変性と神経間質細胞、グリア細胞などの繁殖性変化がみられる。これら繁殖間質細胞核内には、しばしばCOWDRY type Aの好酸性滴状封入体をいれる (TE)。神経節細胞は濃染し、原形質周囲の水腫性空泡化、チグロ融解、原形質融解などがみられ、核壁は濃染を示すものが多い。核内にはCOWDRY type Aに近い好酸性小型からやや大型の封入体をいれるもの (E)、核全体に塩基性顆粒状物質をいれるもの (G)、あるいは核全体が塩基性均質の物質によって占められるいわゆるCOWDRY type Bの封入体をいれるもの (B)などがみられる。なお、好酸性封入体は未熟ウイルスを含むmatrix封入体であり、塩基性封入体は完全したElementary body封入体であるといわれている (BECKER, 1968)。